

特集論文

「総合的な学習の時間」における探究的な学習の過程の適切な指導について

—深い学びを実現するために—

How to teach "process of inquiry learning" in "Integrated Studies"
— To realize deep active learning —

谷尻 治
TANIJIRI Osamu
(和歌山大学大学院教育学研究科
教職開発専攻)

林 真希
HAYASHI Maki
(和歌山市立有功東小学校)

受理日 令和2年1月31日

抄録：総合的な学習の時間で、探究的な学習の過程の指導が十分できているとは言い難い現状がある。経験を積んだ教員でさえ指導の困難さを感じている。アンケート調査などから、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」の4つの過程の中で、とりわけ「課題の設定」が難しいという実態が明らかとなった。世代交代が進む学校現場で、若い教員も含めすべての教員の指導力をあげるために支援体制や研修体制の構築が急務であることを示した。「課題の設定」を行う際に、探究テーマの決定に至るには適切な段階を踏むことが必要で、優れた実践はこの段階を経ていることがわかった。

キーワード：総合的な学習の時間、探究的な学習の過程、課題の設定、世代交代、支援体制

1. はじめに

筆者は2018年度、『「総合的な学習の時間」における探究的な学習の過程 —和歌山に焦点をあてて—』（和歌山大学教職大学院紀要 No.3）で、「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」という一連の探究的な学習の過程（以下、「探究的学習過程」とする）を丁寧に踏むことが学力の向上につながっているという事実、そして、この探究的学習過程を充実させるポイントが子どもたちの意欲をどう高めるかであり、意欲を高めるきっかけは課題の設定と深くつながっているということを主張した。

また、「まとめ・表現」活動をした後にその活動を通して浮き上がってきた新たな疑問などを「振り返り」によって明確化し整理することで、次の課題が必然的に設定されるということも強調した。そして、共同執筆者の早崎大輔教諭がこれらの指導を適切に行っている事例をまとめた。

探究課題については、「小学校学習指導要領（平成29年告示）第5章 総合的な学習の時間編」の「第2 各学校において定める目標及び内容」で、以下のように整理されている。

3 各学校において定める目標及び内容の取り扱い

(5) 目標を実現するにふさわしい探究課題については、学校の実態に応じて、例えば、国際理解、情報、環境、福祉・健康などの現代的な諸課題に対応する横断的・総合的な課題、地域の人々の暮らし、伝統と文化など地域や学校の特色に応じた課題、児童の興味・関心に基づく課題などを踏まえて設定すること。

学校現場では徐々にではあるが探究的学習過程に関する理解が広がり、その指導内容も年々充実してきていると推察していたが、平成31年度「全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」の結果から、児童においては充実した学習過程となりつつあるとはいえない現状があることがわかった。

そこで本稿では、まず学校質問紙調査結果と児童質問紙調査結果の変遷から、その事実を確かめる。さらに、筆者が2019年10月に行った和歌山の教員を対象とした「総合的な学習の時間の指導に関する調査結果」から、探究的学習過程の指導において教員が学習の過程のどのプロセスに困難さを感じているかを明確にする。

その上で、一連の探究的学習過程を充実させるために、教員（特に急増している若年教員）の指導力向上

のための支援体制はどうあるべきかを提案する。また、「探究テーマ」を決めるまでの段階的指導が必要であり、それが適切な「課題の設定」の重要な要素となっていることを具体的な事例をあげることで示していく。

2. 調査結果から浮かび上がったこと

国立教育政策研究所がまとめている「全国学力・学習状況調査報告書 質問紙調査」の結果から、経年変化をまとめたものが下の図1と図2である（グラフは筆者作成）。

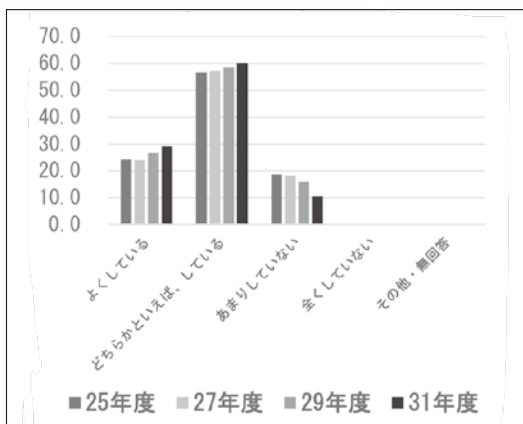


図1 探究過程を意識した 学校質問紙調査結果

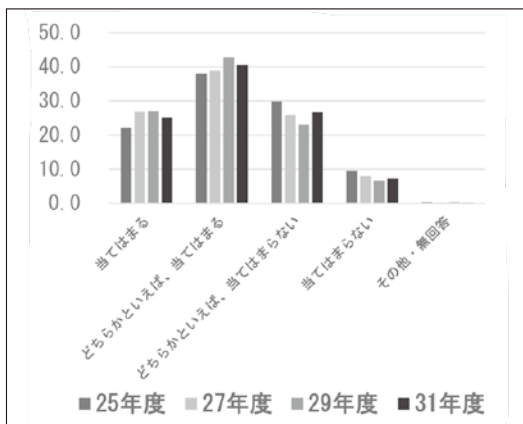


図2 探究過程に取り組んだ 児童質問紙調査結果

図1は学校質問紙調査で管理職が回答しているものである。「調査対象学年の児童に対して、総合的な学習の時間で、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか」という問いに対する学校側の回答で、「よくしている」「どちらかといえば、よくしている」を合わせた回答は増加傾向が明瞭である。これをみると学校（少なくとも管理職）は探究的な学習過程を意識した指導が少しずつ充実していると捉えていることがわかる。

一方、児童の回答が図2である。「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、

調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいると思いますか」との問いに、平成25年度から29年度にかけては「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」を合わせた回答が増加傾向にあった。しかし、平成31年度は、「当てはまる」が25.1%、「どちらかといえば、当てはまる」が40.6%と、調査開始以後初めてこれらの数値が下降した。学校が考えているほど、児童は探究的な学習過程を踏んだ学習ができていると捉えてはいないことが明瞭である。

「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が低下した理由に何があるのか。原因として考えられることを以下に列挙する。

- ①「道徳の教科化」や増加傾向にある発達障害のある児童への支援、また個別化・複雑化しつつある保護者対応など、教員の多忙化が一層進み、授業準備にかけることができる時間が減少している。
- ②学習指導要領の移行期間に入り、小学校3・4年で外国語活動、小学校5・6年で外国語科が導入された。これらに必要な時間数である15時間は総合的な学習の時間を減じて行うことができるとされているため、総合的な学習の時間が実質的に削減されている。
- ③教員の世代交代が進み、経験を積み指導力のある教員が退職する一方、探究的な学習の指導経験が少ない若年教員が増加している。

以上はあくまで仮説ではあるが、教員の多忙化についてはOECD国際教員指導環境調査（TALIS2018）でも明らかのように、小学校教員の週あたり労働時間が54.4時間と対象国の平均値を16.1時間も上回っている状況である。働き方改革が始まったとはいえ、TALIS2013と比較すると、中学校教員はこの5年間で2.1時間の増加となっている。小学校教員は前回調査対象でなかったため比較できないが、学校現場の状況を鑑みると中学校程度に労働時間が延びていると推察される。

筆者は特に「③教員の世代交代」に着目している。そこで、実態を把握すべく、「総合的な学習の時間の指導に関する調査」を実施することとした。対象は「現職院生」「初任者教員」「研究指定校教員」である。「現職院生」は2019年度、和歌山大学教職大学院に入学した現職教員10名（内、小学校教員8名）で講師経歴を含めた平均教員年数は14.9年である。「初任者教員」は和歌山大学教職大学院初任者研修履修証明プログラムで研修を受けている初任者10名（内、小学校教員7名）で、平均教員年数は1.4年である。「研究指定校教員」は和歌山市教育委員会指定「生活科・総合的な学習の時間」研究推進校である和歌山市立有功東小学校教員11名で、平均教員年数は8.6年である（研

究指定校教員については以下「A小学校教員」とする)。2005年度から継続して和歌山市教育委員会の「生活科・総合的な学習の時間」の研究指定を受けており、校内での現職教育は「生活科・総合的な学習の時間」に関する研修を単年度に10回程度実施している。

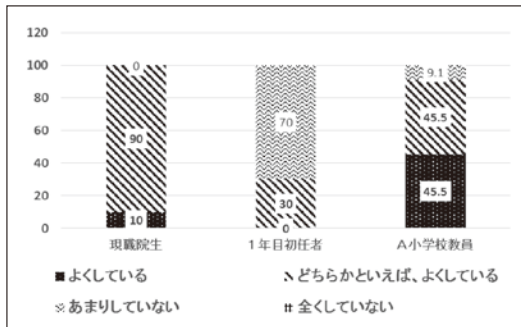


図3 探究過程を意識した指導 教員調査結果

図3は、「総合的な学習の時間で、課題の設定からまとめ・表現に至る探究の過程を意識した指導をしていますか。」という問いに対する回答を集計したものである。「よくしている」と答えた現職院生は10%、初任者は0%である。一方、学校をあげて繰り返し総合的な学習の時間の指導法について学び合っているA小学校教員は「よくしている」と「どちらかといえば、よくしている」を合わせると実に90%を超えている。初任者に「よくしている」がまったくないこと、「あまりしていない」が70%にのぼる点にも注目したい。初任者に限っていうなら、探究的学習過程を意識した指導はほとんどできていないということである。

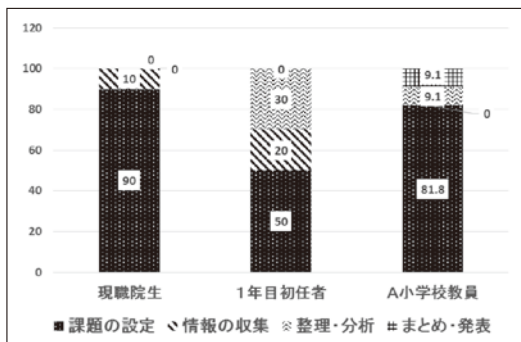


図4 探究過程のどこが難しいか 教員調査結果

図4は、「児童・生徒が、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という探究の学習過程を進めていくために、指導するのが難しいと感じるのはどの段階ですか。」という問いに対する回答を集計したものである。この表からは顕著な傾向が読み取れる。それは、現職院生もA小学校教員も実に9割程度が「課題の設定の指導が難しい」と答えていることである。これは初任者が「まとめ・発表」以外の3に分かれたことと対象的である。

やや極論になるが、初任者は探究的学習過程を踏んだ指導は「あまりしていない」が、どの過程に難しさを感じるかと問われれば、「課題の設定」がやはり多いもののそうとも言い切れなく、探究的学習過程の他の部分にも困難さを感じているといえよう。

そこで、初任者教員と教職経験が3年を超えた教員（計3名）にインタビューを試みて、率直な実態をうかがうこととした。ここに、1年目初任者から10月初旬に聴き取った内容を一部取り上げる。

◆今年の総合のテーマは何か。

□1学期は、「宿泊学習について、新聞づくり」「社会見学に行ったあと、新聞づくり」どちらも個人で新聞づくりを行わせた。

□2学期はまだ正式には決まっていないが、学年で劇を行うことになっている。英語とか社会とか国語とか授業で取り組んだことを一つ取り出して、それを主任の先生が台本にまとめてくださる。各クラスはその台本で、色々なジャンルの活動を発表する。その最後の場面でダンスなども披露する。これは10月末に全校児童と地域の方を前にして発表することになっている。

□11月、12月については未定。主任は計画されているかもしれないが、学年では明確になっていない。

◆4月のはじめに、1年間の見通しをもって学習を進めているのではなかったということか。

□持っていなかった。私がかかっていたただけかもしれない。計画がきちんとあったのかもしれないが、文字化されたようなものを見た覚えがない。

◆教科と総合とを比べると、どちらが指導しやすいか。

□教科の方だ。まず、教科書があるから。逆に総合は何をすればいいのか自分は分かっていない。どんなことが総合なのかも自分の中では明確ではない。経験を積みれば分かるのかもしれないが、教科書で、例えば国語はこうするといったものがある方が教えやすい。

◆総合も含め、今、探究的な学習の過程というものが重視されていることは知っているか？「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という流れで進めていく。

□うっすらと知っている。でも、特別にこれを意識した授業を作れるかというとそれほどできていない。単元構想すら立てる余裕もないというのが現実で、もう毎日の1時間の授業を作ることに必死。この10月になって、やっと国語で単元構想について考え始めたくらいだ。

◆探究の学習過程の中で、もっとも難しいと思われるのはどの段階か？

□「課題の設定」だ。最初のこの段階からよくわからないので、その先のこともよくわからないというのが現状である。

では、大学院で学ぶ現職院生やA小学校教員は、「課題の設定」でどのような困難さを感じているのか。前述の教員調査でこの点については以下のような回答が寄せられた。

まず、現職院生からは「子どもたちにとって自分事となる課題、地域社会にある現実的な課題をみつけ、教材化・単元化する能力と時間が不足していると感じる」「児童が切実感を感じ取り取り組むことができ、かつ、必然性のある課題を考えることが、その学習の成否を握っていると思う」「子どもたち一人ひとり感じる課題が違い、集約したり逆にまとまらなかったりする。反面、同じような課題しかみつからず発展が期待できない」などがあげられた。

A小学校の教員からは「教師と児童の思考にズレが生じてしまうと、児童らは“やらされている感”が出てしまい、意欲的な学習に結びつかなくなってしまう。児童のハテナを上手く拾った課題づくりに難しさを感じる」「子どもの興味・関心から引き出すために、教師が多様にみとり、単元構想の可能性を柔軟に対応し、考えておかなければスムーズに設定できない」「子どもの問題意識をいかに自分事として考えられるように引き上げていけるかが難しい。他人事でなく、且つ、探究に値する課題の設定に悩む」といった回答がみられる。

これらの調査結果から浮かび上がるのは、多くの教員が探究的学習過程を十分に意識して指導しているとは言いがたいこと、特に課題の設定が難しくそれは経験を積んだ教員も感じていること、さらに初任者や若年教員は日々の授業や指導に追われ、単元を見通した授業構想を立てることの経験不足もあり、探究的学習過程の指導が身につけていない状態で児童の指導を行っている実態があるということである。では、これらの問題をどのようにすれば克服できるのか。総合的な学習の時間を継続して研究しているA小学校の活動に焦点をあてて考えてみたい。

3. 探究的学習過程を適切に指導できる教員をいかに育てるか

和歌山市立有功東小学校（A小学校）は2005年度から継続して和歌山市教育委員会の生活科・総合的な学習の時間の研究指定を受けている。A小学校の教員は「2. 調査結果から浮かび上がったこと」で述べたように、担任教員の平均教員年数が8.6年と若い教員

集団にもかかわらず、探究的学習過程を意識した指導を「よくしている」が半数近くにのぼるなど、高い指導力を身に付けつつある。和歌山市教科別研修会の公開授業では、A小学校の生活科・総合的な学習の時間の授業から学ぼうと100名を超える参加者が集まっている。A小学校はこの3年間で5名の初任者が赴任するなど、極めて経験年数が短いにもかかわらず、である。どのようにして、指導力を向上させているのか。以下にそのポイントを示したい。

(1) 年度初めに現職教育で理念の共有

4月当初に現職教育で、生活科・総合的な学習の時間に関する研修の場を持つ。この時は、例年、退職校長などを講師として招聘し、そもそも総合的な学習の時間とはどうあるべきか等、原則的かつ本質を学ぶ機会としている。また、研究主任がこの間の経緯を説明し、これまでの成果を明らかにしつつ、今、A小学校がどのような方向に向かって研究を進めるべきか等を示す場となる。

(2) 全ての教員が研究授業、その前に「語る会」

担任は、一年間の間に生活科・総合的な学習の時間の授業を必ず1回は研究授業として行うこととしている（2019年度からは初任者のみ国語・算数・道徳の内1教科で実施）。研究授業を実施する3週間ほど前に、当日の授業構想を全体に示し、教員でディスカッションする。この場は「語る会」と呼んでいる。この場で助言もするが、これを機に放課後などすき間の時間でも授業者は実践のヒントやアイデアを様々な教員から得ることができる。

(3) 機会あるごとに生活科・総合的な学習の時間の研修

上記とも関連するが、夏季休暇中でも、研修の場を数回持つのが恒例となっている。10月の公開授業研究会に向けて、同僚の実践を聞く場を設定しさらに講師から「今、どのような授業が求められているか」といった講話を聞く。また、公開授業研の協力者（司会者や助言者）を招いて、授業案を検討し改善策を練っている。

(4) 充実したサポート体制

これまで蓄積されてきたA小学校の学びを若い教員に伝えていくことが大切で、そのために研究主任・学年主任を中心に、サポートしあえる体制づくりを意識している。日常的に雑談の中で、探究の視点を共有することもあるが、「〇〇について学習するなら、こんな人がどこにいて、教えてくれる」や「〇〇だとこんな風に学習が展開できるよ」など、授業づくりに直結するヒントを得る機会ともなっている。

以上のように、現職教育を「生活科・総合的な学習の時間」に徹底して絞り込み、その指導力を向上させることを通して、学校全体の学習力＝探究力を育成しているのである。

4. テーマ決定までの「段階」

『総合的な学習の時間における探究的な学習の過程—和歌山に焦点をあてて—』（谷尻、2018）で小学校6年生の指導事例（テーマは『ぼくらの鯛のふるさと～加太が新たな町づくりに挑む～』）を取り上げた。和歌山市立有功東小学校6年光組の担任である早崎大輔教諭が2018年度に指導した光組の学習は探究的学習過程を繰り返しながら、スパイラル的に学習を進展させていく事例である。「課題の設定」→「情報の収集」→「整理・分析」→「まとめ・表現」といった一連の過程を丁寧にわかりやすく展開している。

このような典型例がある一方、テーマ（探究テーマ）の設定、とりわけ「課題の設定」が適切に行えず、スタート時は児童の関心や意欲もみられるが、やがて行き詰まり探究がうまく進まないといった声を聞くことも少なからずある。探究がスパイラル的にうまく進んでいくには、児童が主体的に取り組めるテーマをいかに見いだすかに鍵があるのではないかと、そしてテーマを決めるには子どもの実態や興味関心を看取る時間が必要で、早くとも5月上旬くらいまで、「今年のテーマはこれで進めて良いか」と教員が悩みつつ試行錯誤しているのではないかと考えた。

逆に、4月当初から児童の実態もあまり考えず、時間割や年間計画にそって学校の計画に沿って進めていくような場合に、児童の意欲が持続しないケースが出てくるのではないかと。優れた実践を行っている教員は、始業式前後から、児童の情報を集め、自分の目で実態を確かめ、彼ら彼女らの関心はどこにあるのか、何に興味を示すのか、そういったことを全身で聴き取り看取りしつつ進めているのではないかと。そして試行錯誤の段階を経て、手探りで児童と合意してテーマを決め、具体的な「課題の設定」に入るのではないかと仮説をたてた。

仮説をもとに、2019年度和歌山市立有功東小学校研究主任の林真希教諭に聴き取りを行った。以下は「テーマの決定」に関わる部分である。

◆総合のテーマを決める際に、特に意識されていることや気をつけておられることはどんなことか？

□主に3つある。

(1) 子どもの興味・関心がどこにあるか

この学級を担当すると決まったら、すぐに考え始める。題材が子どもにあってるか。いくつかテーマを考えておいて、どれが合いそうか、どれなら探究が進みそうかを探る。四月に出会って、温めているものを「これであっているか」と時間をかけて考える。

朝の会で、日直がスピーチをする。それ以

外にもお話コーナーという時間をとっている。自分が興味を持っていることを自由に語る時間だ。はじめは語る児童も少ないが、だんだんと増えてくる。その話題から彼らの興味をさぐる。それは遊びの時間も同じ。そういう時に、私が「これかな？」と考えているようなテーマに関わることが出た時は、「えっ、それってどんなこと？」などとその話題に食いついて、子どもたちに広げていく。

国語の授業と繋げて、「話す・聞く」という活動も行う。それらから、ようやく5月の連休明け前後にテーマが決まってくる。

(2) その学習材で、児童が探究し続ける（学び続ける）ことができるか

子ども自身で「ハテナ？」をみつけたり、発見したりするなど、探究することができるテーマかどうかを見極める。活動・体験が入ることも重要である。色んな要素があるのかどうか、イメージを膨らませる。

(3) 魅力的な「人」に出会えるか

テーマに関連する人がどういう人か事前にかがって話をする。また、地域の方や知っている方から噂や情報を集める。実際に会いに行き、お店の人なら買いに行き話してみたりもする。自治会の方に会って話を聞き、地域のようすをつかむこともする。仲良くなってくると、「この人なら、子どもたちも学べるのがたくさん引き出せる」と感じる場面が出てくる。これは直感的な部分もあるが。

「人」との出会いが重要な鍵であることは、社会科研究会での学びで知った。また、この研究会で研究授業を毎年のようにさせていただく中で、人脈が増え、そういった人たちからの情報も実践を組む上で参考になっている。

以上の内容を整理すると、「テーマの決定」に至るまでに次のような段階があると考えられる。

A 児童の興味・関心を探りながら、児童の実態を把握する。



B テーマに関連しそうな活動や体験を入れ、児童の興味・関心が深まっているかを確認する。



C 魅力的な「人」との出会いが生まれるか、探究的に学び続けることが可能かを見極める。



D 児童の出した疑問をもとに学級で児童と話し合いをもち、合意してテーマを決める。

5. 「段階」を重視した指導の実例

ここでは、林真希教諭が2019年度に担任した3年風組の1学期の実践事例を、特にテーマの決定に焦点をあてて取り上げる。林教諭の指導は「4. テーマ決定までの段階」後半部で紹介したA～Dの段階を踏まえて進められている。

A 社会科で校区探検（児童の興味・関心を探りながら、児童の実態を把握する）

社会科で校区探検の学習を行う。2年生生活科の町探検から発展して、4方位に分けて、それぞれの町の様子を比べながら、特徴を知っていく。その際、ただ列になって道を歩いていくのではなく、所要所で立ち止まって、子どもたちがどんなことに興味を示すのか、できるだけ自由に放す時間をとることを心がける。



写真1 自分の目で校区をじっくり観察する

B 公園で遊具を体験する（テーマに関連しそうな活動や体験を入れ、児童の興味・関心が深まっているかを確認する）

子どもたちの関心は校区のお店や公園に集まってきた。南北に長い校区であり、公園の数は10を超えている。それぞれに特色もあるので、探究の価値もあると閃く。子どもらは実際に遊具も試してみても楽しさを知ると同時に、「〇〇公園のゆりかごがぐらぐらだよ」「どうして大きなサボテンがあるのかな」などの疑問を持ち始める。



写真2 遊具で楽しみながら、疑問を持ち始める

C 「人」にも関心を持ち始める（魅力的な「人」との出会いが生まれるか、探究的に学び続けることが可能かを見極める）

偶然出会った地域の方に即席でインタビューを試みる。地域の方の活動が公園の環境維持に繋がっていることを知る。やがて、放課後や親との会話から、お年寄りの方や近所の方がゴミ拾いや花の栽培に努力されている事実も知る。逆に草が生え放題の公園もあることを知るなど、公園と公園に関わる「人」に関心を寄せ始めていることを、朝のお話コーナーなどで林教諭は確信する。



写真3 出会った人にインタビュー

D 発見したこととハテナと思ったことを出し合い、それをもとに「総合でどんなことをしたいか」考え合う（児童の出した疑問をもとに学級で児童と話し合いをもち、合意してテーマを決める）

探検して発見したことや思ったことなどをまずはノートに書き、それを伝え合う時間をとる。一斉発表型で出し合うこともあるが、小グループで司会者を決めて、話し合いの形式にした方が、どの子も参加しやすく効果的である。話し合いの中で、子どもたちの興味を示していたのは、やはり公園のこと。子どもたちは最終決定を多数決で行いたいということで、学習係が仕切って多数決を取り、ほぼ全員一致で公園に決まった。決まったテーマは「ぼくたち・わたしたちの町の公園のひみつをさぐろう!」である。



写真4 総合でどんなことをしたいかの話し合い

ここまで述べてきたように、探究のテーマが決まるまでにはこのような段階的指導があり、それが豊かな体験活動などにも裏打ちされているからこそ、子どもたちの「自分事」となり、このあとの探究がどんどんと加速度的に進んでいくのである。

3年風組は興味をもった9つの公園を調べることとなる（課題の設定）。遊具・広さ・看板・その他の4項目について徹底的に調べる（情報の収集）。そして、たくさんある公園の良さや問題点を整理して見出せるように表にまとめる（整理・分析）。それらを発表することで、比較・共有が進む（まとめ・発表）。やがて、「公園の名前の由来は何か」「遊具は増やせないのか」「看板が古いので新しいものに出来ないのか」など新たなハテナが浮かび上がってくる。

ここからが本格的な問題解決学習となる。それぞれの疑問を解決するために誰に聞けばよいか、どのように調べればよいかを一人一人が考える。家族に聞いてみる、近所の知っていそうな人に聞いてみる、自治会長さんに聞いてみる、自分で公園に見に行ってみるなど調べ方を交流し、実際にそれらの活動を行っていく。

そしてその結果を交流する中で、「活動したいことが本当にできるのかな？」という新たな「課題の設定」がなされ、探究的学習過程がスパイラル的に発展していく道筋が開けるのである。

3年風組は調べてきたことをもとに徹底的に話し合った末に、活動可能なことを「看板作り」と「中央公園と青空公園の草抜き」として実行に移す。本格的な看板をめざして、デザイン案の作成をはじめ、道具の使い方やペンキ選びまで体験的に学んでいきながら、看板を完成させ、公園に設置する。並行して行った全校アンケートで「大好きな公園」を調べ、この調査結果をもとに、新たに気付いたことなどを出し合っていく。大好きな公園から「人が集まる」「心がホッとする」「愛されている」「誰でも使える」という共通

のキーワードが2回にわたる話し合いから浮かび上がり、これを新たな出発点として、2学期は学校の中庭（なかよし広場）をこのような空間にすべく、「なかよし広場をもっとステキにしよう大作戦！」という新たなテーマの合意へとつなげていく。

6. まとめ

探究的学習過程が学校現場で浸透しない理由は様々であるが、その一つが「課題の設定」の難しさであること、そして適切な課題を設定するまでに段階的指導が必要であることを、具体例をあげて述べてきた。

学校現場の多忙化についてはなかなか状況が好転しないが、ここで紹介した段階的指導は決して教師の負担を過剰に強いるものではない。むしろ、児童の興味・関心を軸に進めていくことで、児童自身が主体となって進んで学びを広げ深めていくのである。課題の設定までの段階が「もっと調べたい」「もっとたくさんの人に知ってもらいたい」と知的好奇心に火をつける学習となる重要な段階であることを改めて強調しておきたい。

参考文献

- ・村川雅弘他（2018）、『総合的な学習の時間の指導法』、日本文芸出版
- ・文部科学省（2018）、『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間編』
- ・谷尻治、早崎大輔（2019）、「総合的な学習の時間」における探究的な学習の過程 ―和歌山に焦点をあてて―、和歌山大学教職大学院紀要 No.3、pp.1-8
- ・国立教育政策研究所、平成25年度全国学力・学習状況調査報告書質問紙調査、同27年度調査、同29年度調査、同31年度調査

